

巻頭言「産業理工学部創立50周年を迎えるにあたって」

我が産業理工学部は、1966年（昭和41年）に近畿大学第二工学部として飯塚に誕生しました。爾来49年。来年でついに創立50周年を迎えるに至りました。第二工学部から九州工学部、そして産業理工学部へと、時代の要請に応じて少しずつ形を変えながら半世紀の間、たゆまぬ研究と教育を行い、数々の成果と1万5千人を超す卒業生を世に送り出してきたのです。

学部が創立された頃、筑豊をこれまで支えてきた石炭産業は寿命の末期を迎え、新たな地域の在り方を模索していた時代でした。初代総長世耕弘一先生の歩みを記した「我が生、難行苦行ナレドモ我が志、近畿大学トナレリ」（近畿大学世耕弘一先生建学史料室）の中に、本学部設立に触れるくだりがあります（同書94ページ）。世耕先生は、文科系学部を求める声に対して、「九州は絶対に工学部でいかにやらんのだ！」と一喝しておられます。それは、国づくりや地域振興の根幹に科学技術の振興と発達を置き、アジア諸国への産業貢献を見すえた発言だったようです。つまり、本学部の設立は、単に筑豊地域への貢献に留まらず、国づくりやアジアへの貢献をなすためのものだったのです。

それから49年。我々教員や職員は、諸先輩から現職に至るまで、その期待に応えるべく懸命に努力をまいりました。しかし、我々は果たしてその期待に十分に応えてきたのでしょうか。また、地域をめぐる社会経済状況は大きく変わり、その変化のスピードはますます速くなっています。我々はこれからのように研究や教育を行えばいいのでしょうか。変化の激しい時代に、今までと同じことをしていると取り残されてしまうだけです。しかし、時代の変化にただ迎合していいのでしょうか。我々が今本当にやるべきことは何なのでしょう。

我々は50周年を迎えるにあたって、これらのことを真剣に考えたいと思います。そのためには、これまでの経過を総括するとともに、これから将来に向かって何をすべきかを少し長い時間軸で考える必要があります。50周年記念事業は、そのようなことをみんなで考え、議論をするきっかけだと思います。

2014年4月に、我々は産業理工学部ミッション2014を策定しました（かやのもり二十号、49-55ページ）。そこには、これからの5年間で我々がなすべき研究と教育の方向性と具体的な内容が書かれています。50周年にあたっては、もっと先のことを考えなければなりません。さあ、次の50年。これをどのようなものにしでしょうか。

50周年の記念式典と祝賀会は、2016年6月4日に行われることが決まっています。式場も決まっています。これからほぼ一年間、できる限り機会を見つけて、皆さんとともに考え、議論していきたいと考えています。

近畿大学産業理工学部
学部長補佐 日高 健